「脱福祉」から「超福祉」へ 14

布施龍一さん

NPO法人フェアトレード東北代表

何が終わったのか。何のはじまりなのか。

震災から五年たった。
復興のめどは立ったのか、
被災地の暮らしは、一段落したのか。
いや、違う。むしろ、これからだ。
「被災」の最前線で動く
NPO代表の言葉は、重かった。

編集部＝文
text by KOTONONE
河野 豊＝写真
photograph by Yutaka Kohno

高齢者が徘徊する町

取材を終えて、別れ際、布施龍一さんはこう言った。

「必ず伝えてくださいね。震災で精神を病んだ人は、非常に多いんだ、ってことを。被災地の外では、あまり知られていないことですから」。

こんなこともあった。布施さんの経営するレストラン「牡蠣鉄板HASEKURA」でインタビューをしていると、突然布施さんが、窓の外を歩く人を指差して「ほら、たぶんあの人、強迫性障害ですよ」。ほんとかな？と指差す方向を見ると、小さい背中をさらに丸めて、おそらく女性だろう、一人で歩いている。ちょうどそのとき、石巻で高齢者の徘徊が問題になっていることが話題にのぼっていた。

まだ、終わっていない。いや、むしろこれからだ。冬の石巻は静かで穏やか。瓦礫の山も整理され、あちこちで復興事業が進んでいる様子が、取材に向かう車窓からは見えていた。でも、布施さんの話から、その静かな町で、震災から五年たついまだからこそ噴き出している課題があると、強く感じた。

働けないっていちばんつらい

「NPO法人フェアトレード東北」は、二〇〇八年に設立された、前身となる任意団体の時代から数えると、一五年間、宮城県石巻市で活動してきた。「僕は以前、銀座でバーテンをやってたんです。だけど親父が病気になったことをきっかけに、地元に帰ることにしました。飲食店の経験を生かして、地元で飲食店がしたいなと考えて」。

都会で飲食店をやってたなんて、こっちでは「悪い人」なんですよ、と布施さんは言う。水商売ですから、と。「でもよく見たら、自分と似たような匂いのするお兄ちゃんが集まっているんです。町中で、誰かからクスリを売れって言われて、ふらふら徘徊しているようなお兄ちゃんたちが。話を聞いたら、『家にも帰れないんです』っていう人もいるくらいで」。そこで、その「お兄ちゃん」たちを集めて店をはじめようとした。その矢先に、布施さんは病気にかかってしまう。「潰瘍性大腸炎。難病ですね。安倍首相もかかった病気としていまはメジャーかもしれないですが、当時は誰にも知られていなくて」。治療には時間